

北海文化研究常呂実習施設と「ところ遺跡の森構想」



宇田川洋

大学院人文社会系研究科 教授

人 文社会系研究科附属の唯一の施設である当施設は、北海道東部のオホーツク海とサロマ湖に面する常呂町に所在する教授・助手各1名の小さな研究機関である。1965年、常呂町が「常呂町郷土資料館」として現在の研究棟を建設し、そこを「常呂研究室」として東大に貸与したことにより、助手1名を考古学研究室から派遣したことからはじまった。1973年に実習施設として文部省認可となり、現在に至っている。当初は文学部のみならず、理系などの各研究室がそれぞれ研究棟や学生宿舎を持ち、常呂町を中心とした北方地域の研究を総合的に行おうと壮大な計画をもっていたが、大学紛争のため凍結されたままになってしまった。現在は主にオホーツク文化の考古学的研究が中心であるが、それはシベリア大陸などの北方交渉を解き明かす目的をもっている。それだけではなく、考古学研究室とも連携して、「中期計画・中期目標」に明記された「日本列島の北端と南端を視野に入れた原日本文化研究の推進」を実践する活動の拠点ともなっている。

実習施設が入っている研究棟はかなり老朽化が進んでいるが、発掘調査実習期間は学生・院生で賑わい、その他の期間も主に院生が整理作業や研究の場として利用している。彼らの宿泊用の古い学生宿舎(1968年竣工)は、六角形の2階建てのもので、現在は東大資料保存センターとして機能している。新学生宿舎は2003年に建てられたが、教員室2、学生室12とミーティングルーム他をもつ快適な空間を提供している。東大常呂資料陳列館は1967年に建てられた町の建物を借用しているが、4方向から見て同じ形態をとっているユニークなものである。資料保存センターとともに当時の施設部長の設計である。この資料陳列館は、1957年以来の発掘調査で得られた一級資料を含む専門的な考古資料を展示しているが、町の施設であるところ遺跡の館・ところ埋蔵文化財センターはむしろ一般市民や町民を対象としており、それぞれが役割分担して機能し

ている。

隣接するところ埋蔵文化財センター(1998年開館)は、考古資料の復元作業や実測作業などを見学でき、常呂町の貴重な文化遺産を後世に伝える拠点となっている。ところ遺跡の館(1993年開館)は堅穴住居をイメージして建てられたもので、町内の遺跡から出土した各文化のいろいろな遺物、住居模型、ジオラマなどを展示しており、オホーツク地域の古代文化の学習や体験などを行える事業を展開している。遺跡の館から埋蔵文化財センターまでのカシワやミズナラの自然林は、国史跡・常呂遺跡として約12ヘクタールが1990年に追加指定され、140軒ほどの集落が残されている。ここでは史跡整備事業を東大とともにやり、縄文の村には約4000年前の復元住居が1軒、続縄文の村には約1800年前のものが1軒、擦文の村には約1000年前のものが4軒復元されている。このような諸施設とそれを取り囲む形での体験学習の場を常呂町と東大が協力しあって、「ところ遺跡の森構想」として一般市民に公開し、活用をはかっているところである。

ところで、現在、東大は別の地区にある史跡・常呂遺跡の一部であるトコロチャシ跡遺跡を継続調査しているが、文部省科学研究費地域連携科学研究補助金の交付を受け(共同研究「常呂遺跡」の史跡整備に関する調査研究)研究代表者:宇田川洋、1999~2001年)、常呂町とタイアップして研究を継続してきた経緯がある。アイヌ期の18世紀頃のチャシ(壕などで一定空間を画した遺跡で、多くは砦として利用された)や10世紀頃のオホーツク文化期の集落と墓域の調査などを行い、それらの復元・公開を計画している。これが完成すると、常呂町での以上の施設を巡ることによって、北海道の古代の歴史を学習できることになり、北海道はもとより日本初の試みとして評価されることになる。

このような長年にわたる地域連携と独自の研究を通じて、当施設は機能を発展・継続させているが、2000年からは別の試みがスター

トした。常呂町内を会場にした東京大学文学部公開講座(通称ところ講座)の開催である。学部長や評議員の先生方も講師として講演されて、近隣の市町村からの聴講者も多く、好評を博してすでに9回を数えている。

以上のような「ところ遺跡の森構想」は、開かれた大学として、東大と町が一体となって展開しているもので、常呂町社会教育中期計画にもある町全体のエコミュージアム構想のひとつの核となるものと考えている。以上、施設の研究状況と運用のあり方、周辺の施設などの一端を紹介してみた。言ってみれば、「ところキャンパス」である。

- 01 1965年に町が建設してくれた現在の研究棟。右側面には白樺の半割材を貼り付けている。
- 02 オホーツク文化の堅穴をイメージした六角形の建物。旧学生宿舎であるが、現在は東大資料保存センター。
- 03 新学生宿舎。学内共同利用ができる宿舎。宿泊研修や研究会・会議等に利用が可能。
- 04 学生宿舎の教官室。パソコン対応。
- 05 学生宿舎のミーティングルーム。24人まで対応可能。
- 06 東大常呂資料陳列館。四面に白樺材を貼り付けた外装の考古博物館。
- 07 ところ埋蔵文化財センター。収蔵展示を含むセンター。広いロビーには遺物や模型の展示、樺太アイヌ文化の紹介もある。
- 08 ところ遺跡の館。堅穴をイメージした円形の建物。遺跡の森への導入口となっている。
- 09 ところ遺跡の館の内部のジオラマ。
- 10 ところ遺跡の館の内部展示の様子。
- 11 ところ遺跡の森の中。10世紀頃の擦文時代の堅穴住居跡が今なお窺って見える。
- 12 擦文の村の復元住居。宿泊体験も可能である。
- 13 ところ遺跡の森構想と施設の位置。
- 14 2005年9月に常呂町中央公民館で開催された第9回東大文学部公開講座。受講者には学部長の修了証書が手渡される。

